

思い悩むよりも先に

古本靖久

奨励者紹介〔ふるもと・やすひさ〕

日本聖公会奈良基督教会牧師
学校法人親愛学園親愛幼稚園園長

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を飲むかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みみなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。

(ルカによる福音書 12章 22—34節)

今日、こうしてこの場に招かれ、メッセージを語るができますこと、神さまに感謝いたします。

先ほど読まれた聖書の箇所、新共同訳聖書の小見出しには「思ひ悩むな」と書かれています。思ひ悩むな、そう言われても困りませんか。わたしは普段からいろいろなことで思ひ悩んでいます。教会の礼拝はどうでしょうか。幼稚園で感染者が出たらどうしよう。そういう大きな悩みもあれば、今日のお昼はどうしよう、などなど。

みなさんも、それぞれいろいろなことで思ひ悩んでいるのではないのでしょうか。特にこのコロナ禍の中、今までの常識、今までの日常が当たり前ではなくなりました。思い描いたような大学生活も送れない。そのような方もおられることでしょう。

先日、とても心が痛くなる統計報告を目にしました。ネットで偶然目にした記事ですが、そこには2020年における自殺者の数が書かれていました。厚生労働省の発表によると、2020年の一年間で自ら命を断った人の数は、2万1,081人だったそうです。そしてその内訳ですが、男性は前年よりも23人減った1万4,055人でしたが、逆に女性は2019年から935人増加し7,026人になったそうです。15%も

増加しているわけです。さらに年代別の内訳というものもありました。10歳から19歳までの人が777人。前年の659人よりも18%増加しています。そして20歳から29歳までだと2,521人。この数字も前年の2,117人よりも19%増えているそうです。

²新型コロナウイルス感染症によって2020年に亡くなった人の数は、約3,500人です。単純に比較することはできませんが、その6倍もの方々が自ら命を絶っているこの現状、そして特に女性や若い世代の方々にこの傾向が表れているというのです。自殺者数という統計で物事を語るのには違和感があります。そのお一人お一人にはお名前があり、生きてきた過去があり、そして自らの手で命を終わらせようとした理由があったでしょう。それは、それぞれみんな違います。ただの数字でまとめられることではありません。しかし、この現実を見せられた時に、とてつもなく悲しい思いをもつのです。どうしてその決断をする前に、その人にかかわれなかったのだろうか。その人の存在に気づくことができなかったのだろうか。神さまは一体何をしておられたのだろうか。

「命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思い悩むな」。イエス様は弟子たちにこのように語られました。この言葉は、今を生きるわたしたちにも届けられています。これは単に、食べ物や洋服のことをあれこれ考えるな、ということではありません。すべてを神さまに委ねなさいということです。同じようなことが書かれているマタイによる福音書には、この一文も付け加えられていました。「だから、明日のことで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む」。

委ねるって、どうすることなのでしょう。わたしは九州の福岡で、生まれ育ちました。そして高校を卒業するまで、そこで暮らしました。家から歩いて行ける距離に海岸があり、夏になるとよく泳いだものでした。玄界灘の海で、潮の満ち引きも結構ありました。遠浅なのですが、急に深くなる場所もあって、子どもの時から「泳ぐときは十分に気をつけるように」と、親からも、学校からもきつく言われていました。

もしも海で溺れてしまったら、どうしたらよいと思いますか。大声で助けを呼ぶ。必死で手足を動かし、海岸へ向かう。どれも正しいように思えます。でも塩分濃度が高い場合、口に含んで「しょっぱい」と感じるような海の場合、溺れてしまったときにはできるだけ体力を使わないように、ただただ海面に浮いているということが有効なのだそうです。

当然、状況によってそうではない場合もあると思いますが、水の流れに身を任せ、何よりも自分の力を抜き、だらーんとする。肩に力が入った状態だとなぜか浮くことのない体が、すべての力を抜いたときに、浮くようになるのです。そして誰かが気づいて声を掛けてきても、助けの声が近づいてきても、バタバタ手足を動かさずにだらーんとして待つておく。すると救助者は後ろからしっかりと抱え上げ、引き上げてくれるそうです。

わたしはこれが、わたしたちと神さまとの関係なのだと思います。わたしたちは大きな大きな湖の中で、ずっと泳ぎ続けています。順調なときはそれでよいです。体力もあり、進むべき方向もわかり、自分の力で泳ぐこともできるでしょう。でもわたしたちの人生は、決して順風なときだけではありません。逆風が吹き荒れることも、幾度となく起こります。そのときにわたしたちはどうしても、自分の力で何とか乗り切ろうとするんですね。手足を必死で動かし、顔にたたきつける水しぶきをぬぐい、目を凝らして陸地の方向を確かめる。

しかし、それがどうしてもできなくなったときに、どうなるのでしょうか。わたしたちの体は、そして心は、どうなってしまうのでしょうか。

「思い悩むな」、イエス様はそう語り掛けてくださいます。「神さまにすべてを委ねたらよい。自分の力だけで生きていけなくなったらよい」。その言葉はわたしたちの心に届いているのでしょうか。いやいや、これはあくまで聖書の言葉でしょう。昔々に語られたことを誰かが記録していただけじゃないですか。そう思うかもしれません。確かにこの言葉は、2000年前に語られたものです。

その頃、イエス様の目の前には、虐げられ、弱くされた人々、差別され、人として扱われなかった人たち、病気に苦しみ、今日生きていくのも精いっぱいの人、そんな人たちが大勢集まっていました。彼らはみな、思っていました。自分たちは神さまに見捨てられたのだと。神さまが愛しているのは決められたことをきちんと守り、献金などのささげものをちゃんとして、いつも神さまの前に正しい人たち。そういう人たちは自分たちと違って神さまに愛されている。だから彼らは健康だし、裕福だし、恵まれていると。

しかしイエス様は、その人たちに語られたのです。「大丈夫、思い悩まなくてもよい」と。それには理由がありました。「なぜなら神さまはあなたたちのことを愛しているから。あなたたちのことを大切に思い、手を差し伸べてくれるのだから」。

イエス様のこの言葉は、神さまと自分は関係ない、神さまから遠く離れた存在だと思っていた人たちに語られました。だからこの言葉は、今、ここにいるわたしたちにも与えられているものなのです。「思い悩む必要はない。神さまが必ず守ってくれる」と語り掛けてくださるのです。

わたしたちはそう言われても、何度も思い悩みます。自分を頼ろうとします。イエス様はそのことをよくご存じです。思い悩まずにはいられないわたしたちのことをよく分かっています。だから何度も言われるでしょう。「思い悩むな」と。わたしたちは、これから先も、何度も壁にぶつかり、暗闇の中で起き上がれない経験をしていくことでしょう。でも大丈夫です。「思い悩むな」と言いながら、わたしたちを支え、抱え上げてくださる方がおられるのです。そのことを信じ、すべてを委ねてまいりましょう。

お祈りをいたしましょう。

[注]

- 1 「令和2年中における自殺の状況 第3章 令和2年における自殺の内訳」(厚生労働省)
(<https://www.mhlw.go.jp/content/R2kakutei-03.pdf> 2021年5月18日最終閲覧)
- 2 「新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について(令和2年12月31日版)」(厚生労働省) (https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_15828.html 2021年5月18日最終閲覧)

2021年5月19日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録